

「新燃岳の火山灰採取(4)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka



「シラス販売」のは、「海産物のシラス」ではなく「シラス台地のシラス」のことでした。教科書にも載っている「シラス(白い砂の意味)」は、主として約3万年前の始良(あいら)カルデラの破局的噴火によって発生した入戸(いと)火砕流堆積物です。あまりにも短期間に大量の碎屑物が堆積したため、地層の模様(層序)がほとんど見られません。鹿児島県の面積の50%以上、宮崎県の面積の15%以上を覆っていると考えられています。厚さは100~150mにも達するそうです。



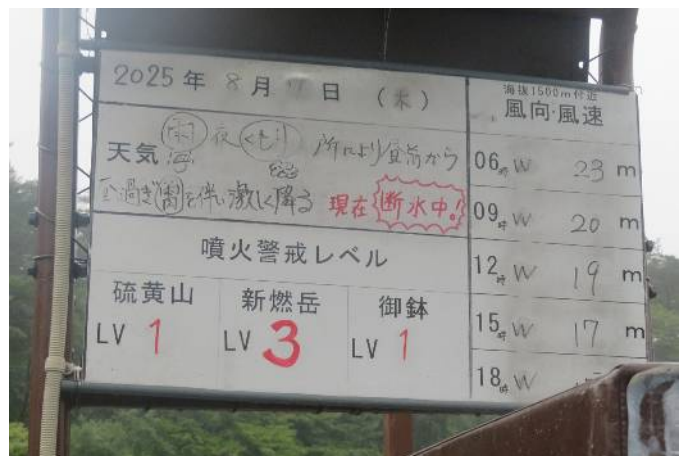
宮崎県都城市から、鹿児島県霧島市に向かう道路からは、シラスの露頭を随所で見られます。一見役に立ちそうもないシラスですが、意外にも建築基礎材料として広く活用されています。コンクリート用骨材(シラス骨材)、軽量骨材、園芸資材、透水舗装などに利用されているそうで、「シラス販売」という看板が多い理由も納得できました。



シラス購入は「ダンプトラック1杯いくら」という単位なので、私は買いませんでした。しかし幹線道路を逸れて、少し脇道に入ると、小規模なシラスの露頭はいくらでも見つかります。研究所の教材用に少し(といっても1kgほど)採取して、持ち帰りました。



新燃岳が近づくと、このような注意喚起の表示が多く見られました。関東では、浅間山山麓などを除けば、まず見かけることのない表示です。



最初の目的地「高千穂河原」に着きました。この日、新燃岳の火山噴火警戒レベルは「3」でした。噴石(火口から弾道を描いてほぼ初速で飛来する危険な岩石)の恐れがあり、登山は厳しく制限されています。